〔聞き書き〕ホトラ山の思い出
―中原眞二さんに聞く―

丸山　徳次

はじめに

2006年6月10日（土）、「龍谷の森」での作業がありました。今年度は、水場をつくるための作業が、学生諸君の参加を得て何度かあったのですが、その日も、午前中から集まって、作業が行われました。「龍谷の森」里山保全の会の有志の方も何人か参加されていました。

昼食後、「龍谷の森」里山保全の会の会員で、「おおつ環境フォーラム」の里山班の代表でもある中原眞二さんと話す機会がありました。きっかけは木槌にありました。水場をつくるときに、川床に粘土を敷くのですが、その粘土を固めるために使う木槌が、中原さんの作られたものだったのです。私はその木槌の見事さに感嘆しました。（カラーページ p.24参照）

木槌をきっかけとして始まった中原さんの話は、私にはとても面白かったので、「聞き書き」として、以下のような文章にしました。メモと記憶だけにたよって、私が、中原さんの話を勝手に再構成しました。再構成した文章のなかには、一部、2007年3月6日の第15回里山ORC研究会の折にお聞きしたものも含まれています。文章の責任はすべて私にあります。中原さんには、こうした文章を書くことの了解は得ましたが、出来上がった文章を見ていただくことはしていません。もし間違いなどがあれば、いずれまた補正することとして、お許しいただきたいと思います。貴重な話を聞かせてくださったことを、中原さんに感謝します。

なお、以下において、〔　〕内は私による注釈です。

聞き書き

私は昭和7年の生まれで、現在74歳です。

堅田から北へ約9㎞ほど行った所、比良山の麓の貫井村に生まれ、そこで育ちました。貫井（ぬくい）は、もとは「ぬきい」とも言われました。貫井谷がある所です。いまは大津市葛川貫井町です。近江神宮から北へ40㎞近く行った所です。

木槌は大きさはどうであれ、「槌」（つち）と呼ばれていました。槌で赤土をたたいて炭焼き窯を作ったものです。昭和33年、34年頃に一気にプロパンガスが導入され、炭焼きをしなくなってしまいましたが、それまでは炭焼きをし、それを売っていました。

私は、昭和20年に戦争が終わる前と後、小学校の生徒のとき、炭焼きを体験したことをよく覚えています。葛川の炭は余りよくない、と言われていました。コナラが主木だったためだろうと思います。シデ（ミズシデ、オニシデ）や、ホス（たぶんソヨゴ）、ネジキ、カシなどの木も炭焼きの材料にしました。堅いものほど良質で、カシは特別良質なため、「カシ炭」として特別に扱われました。ネジキやソヨゴもよい方でした。カシ炭以外は「ダッタン」として扱われました。

炭焼き窯は、大きなものなら70俵から90俵が焼け、一週間連続焼くのです。煙を見て、終了時点を判断しました。煙が細くなり、そよそよとすれば終わりです。窯を開けるのは、次に炭焼きをする時であって、冬に最後の炭焼きをする時には、翌年までそのまま放置しておきます。そうしないで湿った空気を入れてしまうと、窯がだめになってしまうのです。

窯は5年から7年はもつのですが、土の質が悪く、開け方が悪ければ、1年しかもたないこともありました。湿った空気を入れてしまって窯をだめにすることを、窯が「落ちる」と言ったものです。

窯の中央部に太くて大きな木を立てて置き、周辺部には小さなものを置きます。底辺部の土に埋め込んで立てかけるから、埋まっている部分は半焼け状態になり、そうした半炭部分を含むのを、「ガシラ」と呼びました。出来上がった炭の良いものは大抵売りに出し、残ったくず炭（ガシラ）は自家用にしました。

山は「ホトラ山」と呼ばれ、「ホトラ」とは、木と草の区別なく新緑で刈り取ってきたもののことです。〔長野県地方をはじめとして、最近まで「刈敷山」と呼ばれる場所が各地にたくさんあったわけですが、「ホトラ山」は「刈敷山」と同じようなものだろうと思い

ます。〕

ホトラ山で刈り取ったものは、束にして、山の窪地に集めます。そうした窪地は、「シェコ」とか「セコ」とか呼ばれました。窪地に集めて、そこから下に落としました。大抵は夏場の作業でした。束になったものを田んぼのそばに背丈ほどの高さに積み上げるのです。牛の糞があれば、それを混ぜ、土もまぜます。戦後すぐの時代は、すでに石灰窒素を使っていました。牛の糞がなければ、石灰窒素を混ぜていたのです。そうして寝かしておいたものを、春先に田んぼに敷き、田んぼを梳くのです。

ホトラの仕事は、「今日はイイしようか？」と互いに声をかけてやったものです。「イイしようか？」というのは、一緒に共同作業をしようか、という意味です。どういう字で書くのかは知りません。〔多分「結い」から来ているのではないか、と思います。〕

山の上の方は、ホトラ山であって、入会山でした。山の中腹以下の所は、樹木がはえた山であり、個別の所有でした。ホトラ山の入会についての約束事を記した文書といったもは、多分、探せばあるでしょう。「割木山」という言葉もありました。

風呂は、「長州風呂」という鉄製の丸い鍋のような風呂が私の家にありました。「長州風呂」は四角形のものもありましたが、やはり鉄製です。私の家の近くは杉林が多く、風呂の焚き付けには、スギバ（杉葉）を拾ってきて使うことが普通でしたから、上田上あたりのような「こなはかき」〔木の葉掻き〕をすることはなかったのです。スギバは大変よく燃え、焚き付けには最適ですし、わざわざ木の葉を集めに出かけて行くまでもなく、ごく近くにいっぱいあったのです。

柴刈りの「柴」とは、マツ、クロモジ、コバノミツバツツジ等々、雑木の細いものや、薪用に伐った樹木の先端や枝のことであり、それを束にして燃料用に貯蔵しました。柴刈りの時期は、雪解けから田植え前が中心でした。

シイタケは、わざわざホダ場を作る場合もありましたが、林のなかで伐採した樹木を適当な長さに切って放置し、そこにはえてくるようにする場合もありました。また、村の橋に勝手によくはえたものです。橋の横木はクリで出来ていましたから、そこに勝手にはえたのです。

おわりに

今回、私は初めて、聞き書きを試みました。私の専門は哲学ですから、私にとっての

フィールドは通常、書物の世界です。勿論その場合、私のような関心をもっている哲学者にとっては、書物の世界というのは、ただ単に古典的な哲学者の著作ばかりではなくて、さまざまな科学の文献やそれ以外の諸々の文書資料を含みます。しかし、とにかく、聞き取り調査のフィールドワークをしたことはありません。ところが、「龍谷の森」里山保全の会での保全活動のときなど、地元の方々からいろいろな話が聞けて、ただ聞き流すだけではもったいないような思いがしばしばしていました。自分の専門との関係を度外視して、ただ聞き役に徹することも、面白いのではないかと考えましたし、誰かの役にたつかもしれないと考えました。私自身にとっては、これは一つの実験です。

今回は、最初から意図したものではなく、ほとんど偶然に行った記録にしかすぎませんし、ほんの短時間の立ち話ていどにすぎません。ただ、「ホトラ山」について中原さんから話が聞けたので、これだけは是非記録にとどめておきたいと考えました。一般に「刈敷山」と呼ばれるものが、琵琶湖周辺では「ホトラ山」と呼ばれていたことを、以前に何度か聞いたことがありましたが、それについて何らかの体験と記憶をもっている人から直接話を聞く機会がありませんでしたから、中原さんの話は大変貴重でした。「ホトラ」という言葉の成り立ちと由来については、中原さん自身もご存知ないようです。

最後にもう一度、中原さんに感謝します。どうも有り難うございました。